

# 韋 いへん 編

愛知大学図書館報

No. 28

「韋編」……文字を書いた竹や木の札を、なめし皮の紐でとじた上古の書物。

## ミュンヘンの修復士

九月中旬、私はバイエルン州立図書館の「写本・稀覯本修復研究所」にいるシュスター-石井律子さんを訪ね、修復の作業を見せていただいた。彼女が今修復中の本は、九世紀から書き継がれ1479年に完成した、「ロールシュの死者の書 Lorsch Totenbuch」と呼ばれる、芯の板を豚革で包んだ表紙の、ペルガメント(羊皮紙)の、ラテン語の手写本である。「死者の書」は今日の作業を終えて木の万力で締められ、背に砂袋を負い形を整えられて休んでいたが(写真右)、律子さんは万力を外し「本のゆりかごBuchwiege」に載せて中を開いて見せてくれた(写真次ページ)。開きすぎると裂ける恐れがあるので、修復作業は赤ちゃんを扱うように優しくゆりかごに寝かせて行うのである。

修復は必ずパートナーと二人組みで行われる。パートナーは修復前の写本の記録を取り、修復箇所を指定し、修復後は記録と比較して、作業結果を判定する。ただし作業そのものはあくまでも一人の責任でなされる。「死者の書」は40ヶ所の修復箇所を指摘され、すでに作業は二ヶ月かかっているという。羊皮紙が欠けている部分は、その大きさの羊皮紙を作り、紙の色に合った染料で染め、蝶鮫の浮き袋から作った糊(Hausenblaselein、



副学長 海老澤 善一

にべ膠のようなもの)で貼り合わせる。鍵裂けは、骨粉をホルマリン処理してタンパク質を繊維結合させて、幅数ミリの細い短冊状の紙を作り、それを裂けた部分の上に丁寧に貼る。下の文字が読めねばならないから、紙はごく薄いもので、私は補修には全く気づかなかった。表紙の木の欠損箇所は麻の粉をペースト状にした糊で埋めていく。折りのぐらぐらは、麻を擦って通した花切れで補強す



万力の中で休む「死者の書」

る。背の痛みは不織布で仮に接着しておき、豚革で補修する。

紙本の場合はすべて和紙で補修する。修復室の隣りには紙漉場があり、楮30%、三桮70%の和紙が作られている。これは下の文字が透き通るほど薄いもので、濃淡の縞模様をつけて漉いてある。繊維の足を出すために、淡い部分に添って手でちぎって使うのである。

仕事を終えた律子さんとフライハイトの酒場でヴァイスビア3杯とシュナプス2杯を飲んだ（彼女は酒豪である）。彼女は関西の芸大でグラフィックデザインを勉強した。お父さんが製本屋さんで、工芸製本も手がけていたから、自然と製本に惹かれた。しかし工芸製本は機械を導入し人を雇って工房化しなければならない。修復ならば一人でもできる。それに何百年も保つ素材への愛着、信頼感もある。しかし日本では修復技術を習うことができないので、27歳の時、オーストリアに渡って徒弟になった。三年で職人Geselleになり、一年のお礼奉公の時、自分の製本をバイエルン州立図書館に持参し、買い上げて貰い、修復本も見せたところ、その年に州立図書館に設置された「修



本のゆりかご Buchwiege

復アカデミー」を紹介され、その第一期生となった。そして修復士Staatlich-Geprüfter Restauratorの資格を取って、1994年からこの研究所で働いているのである。

律子さんは、修復の仕事は「実存的だ」と表現する。修復という作業が博物館のガラスケースに飾られるような芸術品を相手にするものではなく、実際に使用される生きたものを相手にするという点であろう。最近では、書籍のマイクロフィッシュ化や電子媒体化が積極的に押し進められているが、本は単にフィルムに定着される影や電子媒体に解消されるものとは思われない。本にはそれぞれ固有の重さと特有の手触りがある。私は決して本を眺めて楽しむ愛書家ではないが、文庫本一冊にも個性を感じる。本は生き物であり、その存在感はマイクロフィッシュやインターネットの画面からは感じられない。本を開いたときのインキの臭い、そこから小宇宙が広がり、未知のものを探索する喜びが生まれるのである。

私は、古い物をただ忠実に再現するだけの修復に創造性があるだろうかと、意地悪な質問を試みた。律子さんの答えは単純明快だった。彼女は「創造」という言葉の擬物性を直感しているのだろう、創造は近代以後の観念で、主観的印象の表現にすぎないと言った。創造というものは往々にしてオブジェの持つ存在の豊かさをとらえ損なうのである。

最後に、律子さんは自分がドイツで暮らしていることについて語った。日本人であること、ドイツにいること、この「ある」や「いる」には意味がない、重要なことは何を「する」かである。ところが、日本では「ある」や「いる」のみで人を判断し、そこから権威や上下の関係が生まれてしまう、と。ミュンヘンはそろそろ初冬の気配で、コートの際を立てて彼女は闇の中に消えていった。